

(題目)戦後日本における「ジャズ・フェスティバル」の受容と定着過程

(氏名)加藤夢生

(所属)東京芸術大学大学院音楽研究科音楽文化学専攻(音楽学) 修士 2 年

(要旨)

本研究の目的は、①戦後から 1970 年代後半にかけて日本でジャズ・フェスティバルがどのように受容されたか明らかにすること、そして②その受容が、その後、国内で変容を伴いながら増加するジャズ・フェスティバルに対して、どのような基礎を形成したか明らかにすることである。

戦後日本のジャズ受容において、録音技術がラジオやテレビなどのマスメディアとともに大きな役割を果たしたことはよく知られているが、近年の研究によって音楽受容の「場」もまた、それに大きな重要性を持っていたことが明らかになり始めている。先行研究としては東谷護[2005]、M.モラスキー[2010]の研究が挙げられる。これら研究の対象はマイクロで恒常的な「場」であったのに対し、フェスティバルは、規模が大きく一時的な「場」であると言える。このことから、研究手法としてはマスメディア(雑誌、新聞、映画)における表象分析に重点を置く。なぜなら、広告やレポートとして役割を果たしたそれらメディアは、イベントそれ自体と同じか、それ以上に大きな役割を担っていたと考えられるからだ。

本発表で中心となる内容は次の 2 点である。

①戦後から現代までの国内ジャズ・フェスティバルの歴史的概観。

研究の前提となる部分として、国内の主要なジャズ・フェスティバルを社会背景とともに概観する。結論は次の 2 点である。[A]全体を次の 3 つに時代を区分できること。1.~1970 年代:雑誌・映画による移入期、2.1970 年代~1990 年代:発展期。文化支援との結びつき、大衆化の時代、3.1990 年代~:地域活性化目的フェスティバル増加の時代。[2]このような変遷の一方、戦後から一貫したジャズ・フェスティバルの系譜が存在し、それはアメリカの「ニューポート・ジャズ・フェスティバル」に端をなしていると考えられること。

②戦後から 1970 年代における「ニューポート・ジャズ・フェスティバル」受容分析。

「ニューポート・ジャズ・フェスティバル」は 1954 年にアメリカで始められたフェスティバルであるが、日本ではその初期から雑誌のレポート記事を通して知られ、その後の国内のジャズ・フェスティバルの形成に特に大きな役割を果たした。ここでは一例としてこのフェスティバルに焦点をあて、戦後日本におけるジャズ・フェスティバルの受容の一端を明らかにする。特に、このフェスティバルの第 5 回(1958 年)の記録映画「真夏の夜のジャズ」(1960 年日本公開)とその日本における受容についての分析に重点を置く。調査の結果、このフェスティバルの記録映画を通して受容された「場」の魅力が、その後に国内で開催されるフェスティバルの重要な構成要素の一つとなったことが明らかになった。

以上の内容に加え、先行研究と本研究の方法論上のつながり、ジャズ・フェスティバルの定義、今後の見通しなどにも言及する予定である。